

ある旅の伝説 (2)

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラー著
松川 弘*・訳

(平成20年9月11日受理)

Legenden einer Reise (2)

von
Eugen Gottlob Winkler

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 11, 2008)

ある日の午後、私は、不意の空腹感を抑えるためにたった今買ったばかりのクッキーを誰にも邪魔されずに食べるつもりで、リアルト橋の近くの人気のない中庭に歩み入った。鳩たちが、私を見つけて飛んできた。そのかなり大きな群れが、すぐに、クーター鳴きながら、首を伸ばして、私の足下に歩いてきた。私は、彼らのはっきりした求めに応じてパン屑をばらまき、彼らはくちばしでそれをガツガツむさぼり食った。人間の習わしからすれば額に汗して手に入れるべきパンを、あまりにたやすく彼らのものにさせないように、私は、手近かにいる鳩たちに、まだ皮がついたままで手間をかけずには平らげられない、大きめのパンを与えた。くちばしをパンの柔らかい部分に突っ込んだ、一羽の鳩が、かたまりを独占するために、それを脇に引っ張って行こうとしたが、すぐに群れ全体に追いかけられた。鳩は、慌ててそのかたまりを呑み込もうとしたが、他の群れは、直ちに、それを奪い取る構えを見せた。

この有様を眺めていた私は、突然、足元に何か軽く触れるものを感じた。振り向くと、一匹の猫が、私の背後に身を隠して様子うかがい、鳩たちの振る舞いに注目していた。パンのかたまりは、一羽のくちばしから他のくちばしに渡った。危険に気付かずに、鳩たちは、それを追いかけて小走りに歩いていた。猫は、私の存在にはほとんど注意を払っていなかった。それは、猫にとって、私は、この緊

張の瞬間、人間としてのあらゆる意味を喪失し、情熱的で、生命力に満ち、しかも破滅と背中合わせの動物界に現われた、格好の遮蔽物に他ならないからだ。私が一押しするか、脇に一步寄るだけで十分だった。そうすれば、猫は、自分が忍び出てきた玄関の暗闇に跳び帰ったであろう。しかし、この疑問の余地のない、完全な世界の出来事に、どこかの高みから介入する権利が、私にあるだろうか？私は、自分自身が確信出来ない感情に左右されることは、決して正しくないと感じていた。だから、私は落ち着いて振る舞い、猫の好きなようにさせた。無心の生の出来事の成り行きを見守るチャンスに自分がひどく興奮したことを、私は自状せざるをえない。私は、呪縛されたように、次に来るものを待っていた。

猫は、野生の警戒心を研ぎ澄ませた状態にあった。猫の体は緊張し、力と慎重さ、激しい欲望に満たされていた。来たるべき跳躍のエネルギーが、灼熱した溶岩のように、長い間、後足の毛皮の下に流れ込んでいた。暗闇の中で光る眼をもった猫の頭は、地面にぴったり横たえられ、動かなかった。そして、鳩たちが、パンのかたまりを入口の階段の前に転がし、三、四羽でそれをついばんだ、その瞬間に初めて、猫は飛びかかったのである。

鳩たちは、羽根をばたつかせていた。彼らは、本能的に身に迫る危険を察知していたのだ。彼らは、羽ばたいて飛

* 広島工業大学工学部電気・デジタルシステム工学科

び上がろうとし、その荒々しい羽ばたきが、大気を震わせた。しかし、そうした行動をあらかじめ計算に入れていた猫は、跳躍の目標を地面よりも高い所に置いていた。猫は、空中で、羽根をばたつかせる一羽の鳩の背中に爪を食い込ませ、ともに地上に落下した。出来事の結末に急に興覚めた私が、可哀想に思い、猫を獲物から引き離そうと決意したとき、鳩はすでに致命傷を負っていた。鳩は、私の手の中でピクピク動いていたが、猫は、その間に、大きく跳躍して、中庭を横切って逃げ去った。鳩の血まみれの首への指による愛撫が、手の施しようがない鳩を安らかに死なせてやるための動きに変わったとき、私は、筆舌に尽くし難いほど度を失った。それは、鳩をうまく敵から守ってやることを自分が怠ったからではなく、両方の動物にたいして自分が不正を働いたように感じられたからである。猫は生活を、鳩はその死を、騙し取られたのだ。

さらに困惑しながら、私は雨の中を歩き続けた。雨の夕空は、路地の上の狭い隙間に急速に広がって行った。家々の壁は、溶解して、ぼんやりした闇と化した。道は、その闇に合流し、私は、思いがけぬ所で、戸や扉に出くわした。隅の方で、先に通じる狭い通路がかるうじて見つかったが、引き返さざるを得ないこともあった。岸沿いの小道を通り、橋を渡って、私は、もっと賑やかな通りに入った。そこでは人々がひしめき、動き回り、光と喧噪が溢れていた。だが、これらもまた、ほとんど現実離れしていた。教会の戸口にうずくまる乞食の黄ばんだ手、朦朧とした闇の中の像への無言の祈り、少女の眼の輝きと囁き、それらはすべて、この町では、不気味な幻影と化していた。これに直面してたじろがぬ者がいるだろうか？ 思慮深げに角を下ろして、悠々とマルコ広場を横切って行く雄牛は、確かに、この世界のものを溶解させる大気にも無傷のままにいるだろう。彼は、古風な、ほこりと過ぎ去った時の匂いがするサロンを横切って行くように思われた。それは、私の立つ、この四方を壁で囲まれた方形が、本来の意味での広場ではなく、外界の一部を人間の狭い居住空間に置き換えたものでもないからだ。この巨大な空間では、マルコ教会の絵のような正面が正しい効果をあげており、内部空間の端から見ると、それが蜃気楼の像のように見えた。広場は、光を取り込むためだけに築かれていた。太陽が輝くと、ファッサードの幻想的な形が、光と影で織られた絨毯に織り込まれるのだった。夕べの星が、燃えるように、黄金色のモザイクの奥に沈み、壁がんに闇が巢食い、骨のように青白い電灯の光だけが、教会の正面の一番外側の張り出しに触れる夜、教会は、弱々しい海月の巨大な石灰の骨格のように見えた。

広場の三面は覆いのついた遊歩廊に取り囲まれており、天気の悪いときは、その下を、人々のゆったりした流れが

進んで行った。そんな時、広場には人気がなく、時折、雨のために傘がとんぼ返りするのだった。鳩の群れは消えてしまっていた。そして、雨空の味気ない光の中で、教会の正面は、花火の燃え尽きた棒のように突っ立っていた。

私は、遊歩廊の下に並んでいる店のショーウィンドーを眺めては、暇をつぶした。実際優雅に見え、商品にうやうやしく仕えているのは、その内のほんの僅かだった。大抵のショーウィンドーでは、つまらぬ物に敬意が払われており、ここでは、それらが、野蛮な、すべてを征服する威厳を備えていた。だが、そうした俗悪な代物も、通行人の視線を自分の方に引き寄せるには至らなかった。

ある時計屋のショーウィンドーには、胴の張った壺が置いてあり、その壺は、水で満たされていた。底には、時計のむき出しの機構が横たわっていて、金魚が一匹、それを気にかけることもなく、単調な円を描いて泳いでいた。確かに、この壺は、陳列の主催者にとって、それほど重要ではありえなかった。金魚は、この壺の内部で、自由に振る舞うことができた。ただ、魚の泳ぎ方で、この時計商が相当な人物であることが知れた。つまり、ガラスの中身が錯覚の産物であるというような考えは、観る者の心に到底浮かんではこないのだ。まるで絵本でも見るように、魚が泳ぎ回り、泡を出し、ゆっくり水面に浮かび上がってきたりするので、時計が現実には水中に置かれていることについては、疑いを差し挟む余地が何ら生じ得ないのである。時計を駄目にするには、水滴が一粒あれば十分であることを、誰もがよく知っているにもかかわらず、そうになってしまう。他の時計は駄目になるが、この時計は大丈夫だとでもいうように。この時計は、何か不思議な性質を持っているに違いない！この時計が、ここで買える。それも安価で。さあ、どうぞ！この時計は、何百も、ショーウィンドーを満たし、ビロードを張った棚に置かれ、壁に掛かっている。そのどれもが他のものと全く同一なのだ。ここで意地悪く、ガラスの中に陳列してある時計を誰かが水の中から取り出したら、それはもう動かなくなってしまうと言う者が、果たしているだろうか？

他の店は、ガラスの販売にいそしんでおり、この素材が意外な利用度を持っていることが示されていた。世界全体が、ガラスで再びよみがえっていた。ガラスのゴンドラ、花、動物が売られていた。ガラスのマルコ教会は、品薄だった。人間の姿もまた、ガラスへの変身を免れることは出来なかった。男女のダンサー、楽団、群れを連れた羊飼いは、ガラスの姿を見せることを受け入れねばならなかった。しかし、昔の名人が類似のものを作ったときの技能や感情の純粹さにかわって、ここでは、グロテスクなものを得意がる、馬鹿げた奇抜さや安っぽい刺激の病的な欲望が現わ

れていた。

際どさもまた、欠けてはいなかった。何十年も誘惑するような姿勢を取り続けている、黒、赤、青のガラスで出来た裸女たちは、自分たちの魅力に狂喜する人々が相変わらず存在することを知っていた。ガラスを溶かして作られたミロのヴィーナスは、指の大きさに縮小されていた。そうした馬鹿げた小人たちは、考えられる限りの冗談を飛ばし合っていた。彼らは、灰皿に腹ばいになり、物思いに耽った観察者がそこで煙草の灰を払えるように、足を、悪戯っぽく空中に伸ばしていた。ガラスの栓の延長部として、小人がぶらさがっている香水瓶もあった。瓶がその用途に合わせて用いられると、いい匂いのエキスで容器が満たされる度合に応じて、その小人は、足まで、胸まで、あるいは頭まで身を浸し、湿った香気を、あらゆる点で淫らな鼻先に導く仕組みになっていた… ようするに、その可能性は想像を絶していた。

つまるところ平凡なこれらの品物にあって、人を狼狽させ無気味がらせているものは、個性の完全な欠如であって、それは、品物が、時計のように、ショーウィンドーの中に一続きで陳列されることによって、とりわけ強調される。品物は、互いに任意に交換可能であるように見え、それを見つめていると、人は、思わず悲しくなってしまう。それは、我々の時代一般を支配している、例の本質と実在にたいする軽蔑が、その中に、恐るべき明確さで現われているからだ。これを引き起こすのは、決して品物の数の多さではない。そこに生じているのは、あらゆる一回性の完全な抹消であり、それは、精神や生の喪失と同義である。私は、ここで客として期待されているのがどういう人間か、想像してみようとした。私は、振り向いてみるだけでよかった。彼らは、私のそばを通り過ぎ、ショーウィンドーの前で立ち止まり、買おうかどうか思案していた。私の見るところ、彼らは、これらの品物同様、互いによく似ており、簡単に交換し得るように思われた。

その直後、パドヴァ大学¹⁾の学生たちが、昔からのしきたりで、ヴェネツィアでの自分の学位授与を公示する掲示を張り出す、時計台の隅に、私は、ひとつの素描画を見つけ、それに強烈な印象を受けた。白地の背景に、鋭い輪郭線で描かれた人間の頭が認められた。髪は分けてあって、その髪の毛の一本一本が、極めて念入りに描かれていた。髭と襟、ネクタイも認められた。しかし、顔面には、弓形の眉しかなかった。その他は、何も描かれていない白い平面で、その下に、名前が記されていた。

これは、もちろん、冗談半分で描かれたものだが、私には、極めて意味深長なものに思われた。この顔の取り替えの可能性が、その空虚さに由来していることを、私は見抜

いていた。

不安気な熱情を込めた大道芸人歌手の歌が、楽器の伴奏を伴って、群衆の頭上を流れ去った。

家の建て込んだ、狭い広場の一角で、近隣のすべての人々が寄り集まり、戸や窓が開かれ、そこから人々が身を乗り出して外を眺めていた。その真ん中に、今演奏を終えたばかりの楽士たちが立っていた。

大きな拍手が起こった。念入りに紙でくるまれた銅貨が窓から雨のように降り注いだ。女性歌手の姿も見えた。赤ん坊を抱いた若い女で、空いた方の手に小さな鉢を持って、弥次馬たちから金を集めるために、あちこち歩き回っていた。弥次馬たちは、すぐに、気前よく金はずんだので、小さな鉢は、瞬く間に一杯になった。こぼしを固めたままで眠る赤ん坊が、肩に重たくのし掛かっているにもかかわらず、彼女は、受け取った貨幣を一枚も逃さず、深い、丁寧なお辞儀でそれに答えることもほとんどなかった。

それから、彼女は再びきちんと立った。新たな曲の演奏が始まり、長く尾を引いた、苦悩に満ちた歌が、聴き手の心を実際よりもはるかに悲しくした。彼女は、よく通る声で情熱的な歌詞を歌い、高みに駆け上る小刻みな調べに合わせて小股に前に歩き出した。旋律が叙情的になると、彼女は、腕を掲げて、自分の声の輝きを絹織物のように感動した聴衆の前に広げて見せ、音の豊かさが弱まると、腕ががっくり落とし、突然、靴のかかとを軸に体を回転させて、聴衆たちに背を向け、今度は、別のグループに向かって歌い出した。その間、赤ん坊は、母親の振る舞いに頓着せず眠り続け、その小さな顔の緊張した顔付きから生じた眠りを、ひたすらむさぼっていた。

こうして、歌は、皆に極めてうまく支えられて、すでにかなりの間続き、もう第二節に入っていた。聴衆や二人の伴奏者が、歌手の素晴らしい弱声に聴き惚れていたとき、一人の警官が聴衆を押し分けて進んできて、彼の到来に気付かない老人の肩をうしろから掴んで、無遠慮に襲いかかった。

歌は中断された。それが終わったとき、哀惜の声が漏れた。アコーディオンがまず沈黙した。調子はずして、その音は消えていった。驚愕のあまり狂ったようになったフルートは、なおも演奏を続けたが、正しい音程に復帰するとすぐ、沈黙した。声が、一番長く持ちこたえた。それは、高い口音から転調して、苦しげに変口音に移行したが、警官が最初の質問を発したとき、赤ん坊を背負ったこの女性歌手は、まだ歌っていた。

警官は、老人に、誰が彼にこの町で興行する許可を与えたのか、質問した。老人は、自分の着古した上着をくまなく探し、胸ポケットから、畏敬の念を抱かせるほど古びて

縁のほつれた汚い書き物を引っ張り出して、無器用な指でそれをつかむと、それを広げて、その筋の役人に恭しく差し出した。

この警官には、もちろん、下僕らしいところはかけらもなく、お上そのもののように見えた。彼は、投げやりにその書類に目を通し、肩をすくめ、ヴェネツィア方言で私に理解できないことを何か言った。そもそも、老人と警官の間で交わされる興奮した言葉のやり取りのほとんどを、私は聞き逃した。しかし、両者の身振りや、観客がその争いに添えた喝采が、理は楽士の方にあるに違いないという確信を私に抱かせた。老人は、曲がった指で、警官が手にした書類の、興行許可が法律のすべての規則に従って書き記されているように思われる箇所を、絶えず指し示していた。老人をよく観察した私は、彼の興奮の中に何らかの偽りが潜んでいることを察知した。そこに立ち現われているのは、悪党が自己弁護するときの過度の興奮ではなかった。警官は、書類に誤りが見つかるはずだと思っていたのかも知れない。だが、老人がそれで身を守っている確信は、世界の秩序にたいする揺るぎない信仰に基づいていた。そのおかげで、彼は、この小さなヴェネツィアの広場で、家族たちとともに、何ら法律に抵触することなく興行することができたのである。この状態は、彼が生きている限り続くはずだった。そこにお上の代表がやってきて、異議を申し立てたので、彼自身の行為のみならず、人が露天で興行してパンを得るといふ昔ながらの習いそのものが疑問に付されることになってしまった。老人の興奮は、異論の余地なく、超個人的な事柄をめぐって憤激する厳粛な熱意なのであった。

警官は、思いもかけぬことをしでかした。楽士の話も聞き終らぬうちに、指を伸ばしてその疑わしい書類を掴むと、彼は、その上端の真ん中をつまんで、集まった群衆に処刑された者の首を示す刑吏のように、それを見せびらかすと、突然、上から下まで真っ二つに引き裂いてしまった。「よし！」彼は、切れ端を慎重に重ね合わせて再び引き裂き、手のひらが小さな切れ端で一杯になるまでそれを続け、最後に、厳粛な一吹きで、紙片を空中に吹き飛ばした。

老人は、身じろぎもしなかった。腕を垂らして、物も言わず、まるで警官にすべてをやり終えるのに十分な猶予を与えようとしているかのように、じっとそばに立ち尽くしていた。だが、彼はそのとき、この思いがけぬ行為に歯向かうべきであった。現実には老人が勢よく警官に飛びかかり、その首を絞め付け、突然のことで身を守ることができず立ちすくむ彼を地面に押し倒して、悲しげな叫びを上げながら、干からびたこぶしで警官に殴りかかったとき、誰一人老人の意図を推測することが出来なかっただけに、み

んなが思わず叫び声を上げた。

この瞬間、老人は、考えられないような力を自由に揮うことが出来たに違いなかった。力強い大男の警官は、数秒後に状況を把握して、抵抗しようとしたが、この実力の違う争いで老人の方が優勢であることは、最初からはっきりしていた。二人は、お互いに激しく絡み合い、舗道の上であえぎながらのたうち回った。時が経つにつれ、警官の方がうまく上になることもあったが、老人は、そのたびに彼を地面に投げ倒した。老人は、痛みも疲れも感じていないように見えた。堪え切れずに、彼は、警官の胸の上に腰を下ろして、腕を巻き付け、それで警官の脇腹をきつく締め付けた。この攻撃の仕方でも自分の腕が使えないので、彼は、その小さな頭で警官の顔をやみくもに殴りつけていた。

私自身を含めた見物人たちは、一人残らず楽士の味方をして、警官が逃げ始めるたびに歓声をあげた。彼は、息を殺して、力なくコソコソ逃げ出そうとするのだった。すべての状況から判断すると、警官を打ち負かさなくても、差し当たり抵抗出来なくして、家族を連れ路地の迷路の中に逃れることは、老人には可能であった。一体誰が、この時点で、最悪の事態を予想し得たであろうか？

だがその時、自分の柔和な魂を驚愕で満たしたこの争いを是が非でも止めさせようと決意して、フルート奏者が介入してきた。この瞬間、彼は、もし老人を警官から引き離すことがうまくいけば、妻の父親を復讐に燃える司直の手に引き渡すことになってしまうということを考えていなかったに違いない。

彼は、爪先立ちで、慎重に、地面に倒れている二人に近づいていった。彼は、そのことで自分の恐怖心を振り払おうとでもするかのように、両腕を突き出して体のバランスをとり、伸ばした首を左右に動かした。彼がとうとう二人の上に身をかがめたとき、それが美しい王女に近づく頼りなげな少年のように見えたので、我々はみんな笑った。彼が本気でそんな大それたことを実行できるとは、誰も思っていなかった。

だが、奇妙なことに、それが実現したのだ。フルート奏者は、老人の肩に少し触れただけだった。それは、ほとんど気付かれぬくらいの軽い手の接触で、彼は恐る恐る頭を垂れて、「お父さん」と言い添えた。すると、老人は、まるで魔法にかけられたように、急に警官から離れ、彼の無気味な力は消え失せ、その怒りは崩壊し、奇跡は突然終焉を迎えたのである。親しい人物の接触と言葉だけで十分だった。それで、彼は、力の灼熱から、無防備な弱さに逆戻りしたのだ。

老人の覚醒と同時に、争いの帰結は明確になった。落ち着きを取り戻した警官が、悪口雑言を浴びせながら徐々に

身を起こしている間、老人は地面にうずくまって、毛をむしり取られた鶏のようにその姿勢を崩さず、目蓋のない鳥のような目で辺りを見回して、膝をついて起き上ろうとしたが、力なく脇へくずおれた。

世界は秩序を取り戻した。弱者が、それに相応しく地面に横たわっていた。つい今し方まで力が彼に生气を与え、数分間彼を力強く見せていたことが、今や彼の仇となった。そのかつてのものすごさにもかかわらず、そこから必然的に罰と贖罪が生じるに違いなかった。それははっきりしていた。その場に居合わせたわれわれはすべて、破滅が近づきつつあるのを感じていた。真っ黒な鳥の群れが、われわれの頭上に舞い降りてくるように思われた。たった今その威信をひどく傷つけられた警官は、今や、強者に相応しく、自分の地位と威信を取り戻そうとしていた。彼は服についたほこりを払い、制服の乱れを直して、争う間に紛失した自分のヘルメットを求め、激怒しながら叫んだ。「どこにあるんだ！」誰もそのありかを知らなかった。ヘルメットは消え失せたままだった。争いが衆目を集めている間に、おどけ者が、それをこっそりどこかへ運び去ったのだろう。もう二、三人が笑いかけていた。それに対して自分が無力な嘲笑をもうこれ以上挑発しないように、警官はヘルメットの搜索を断念し、罪人の方に向き直って、取り戻した落ち着きと圧倒的な力で彼に立ち向かおうとしていた。だが、今悪態をついたところで、それにどんな意味があるというのか？呪いか、侮辱か、脅迫なのか？色鮮やかなモールをつけた警官が大声で騒ぎ立て、その声が轟き渡って広場に面する家々に反響している間、すでにもう別の旋律が鳴り始めていた。その旋律は、われわれには聞き取れず、それを聞き取ることが出来たのは、フルート奏者と歌手だけだった。しかし、見物人たちは、二人の動きから、その旋律を読み取ることが出来た。二人は優しく老人の方にかがみ込んだ。見物の女に赤ん坊を預かってもらっていた娘は、胸元からハンカチを取り出して、そのきれいな方の面で老人の頭を拭いてやった。息子は、腕を老人の首に回して彼を抱き起こし、慰めの言葉をかけて彼を元気付けた。怒っている警官に構わず、二人は、老人が元気を取り戻すまで辛抱強く待ち続けた。二人に介護されて老人が身を起こすことが出来るようになったとき、彼らは老人を間に挟んで腕で支えた。女は、事件を知らずにすやすや眠っていた赤ん坊を自分に返してくれるよう頼んだ。そして、彼女は子供を腕に抱き、フルート奏者は楽器を引きずるようにして、無愛想な言葉で彼らに道を指示するヘルメットのない警官の先に立ち歩いて行った。

天気が好転して以来、私はヴェネツィアの対岸のリド²⁾に滞在していた。快適な大型のモーターボートは、短時間の航行の後、リヴァ・デリ・スキアヴォーニ³⁾に着いた。私は、往路は船尾に席を取り、帰路は船首に立った。そうすることで、渡航中、ヴェネツィア総督邸を絶えず目前に見ることが出来た。

すべての建築上の慣例や法則に矛盾するその建物の形態は、海上から見ると、それが占める位置からして当然の結果であることが分かった。宮殿は海に向かって建てられており行き来する船からそれが見えるようになっていた。宮殿の建つ平らな地面は、海面すれすれの高さしかなかった。建物を実際に築き、それを堅固なものに見せるためには、徹底した杭囲いが不可欠であったに違いない。大人の背丈にも足りないが、太くがっしりした柱の列が上に伸び、その上に、幅の広いゴシック様式の尖頭アーチが懸かっている。さらに、広い足場が分岐して、幾重にも入り組んだゴシック風の回廊が花開き、かつては町の中心部を取り巻いていた強固な壁がそれに続く。壁の広い表面は、黄褐色やや蔷薇色の煉瓦を組み合わせて作った菱形の模様で活気付けられている。

リドの上陸地点から、私が泊まったホテルまで、徒歩でたっぷり半時間かかった。道はリドの狭い島を真一文字に横断する一本の通りで始まっていた。秋の終わりにもかわらず陽気な緑を保った巨大なプラタナスの木が、通りの両側に並んでいた。しかし、夏が過ぎ去ったことは、よるい戸を下ろしたホテルや人気のない別荘からも窺えた。通りには、ほとんど人影がなかった。ポスターが、派手な色の絵ですでに終わった祭典を相変わらず宣伝していた。一面に星がきらめく夏の夜空が描かれ、互いに寄り添うようにして踊る男女が見え、空には銀色の月が懸かっている、ヤシの扇状の葉を通して微光を放っていた。それらはすべて、8月のある水曜か木曜のことであった。

並木沿いに歩いていると、時折、どこかの店主が、店に入るよう私に勧めた。「いらっしゃい。お買い求め頂く必要はないですよ」と彼は言った。少なくとも客らしく見えるのは、見渡す限り私一人だけだった。確かに店主は、収入を当てにせず自分の店の品物について真剣に話したいという欲求に駆られていた。私は、彼の願いを喜んで聞き届け、自慢の品物を示させた。それは、ちょうど子供たちが自分のままごとのお店で遊んでいるようなものだった。というのは、買うべき物がここには実際何もなかったからだ。品物は全部夏向きで、しなやかで柔らかいウールの水着、明るい色の革で出来た軽いサンダル、巨大なパナマ帽といった具合だった。それに相応しい水、砂、太陽は一体どこにあるというのだろうか？それに、紐を編んで作った

小さな袋、絹製の赤い小パラソル、鮫革の魅力的なベルト、それらは夕食のテーブルのためのお土産としては、おあつらえ向きだった。私は微笑み、それらを念入りに見て肩をすくめた。「独身だからね。」

この通りをぶらつくのは楽しかった。夜になると、街灯が、際限もなく長い展望を作り出した。静かな無限の孤独が、重苦しく確実に、通りに広がっていた。だが、この気分には耐える者に、孤独は、落ち着きと朗らかさをもたらしてくれたのである。

別に急ぐ必要もなかった。地面の枯葉は故意に無視された。実際、枯葉はほとんど見られず、見渡す限り、通りの端に至るまで、プラタナスの枝には、抗し難い濃い青葉がついていた。

通りは、それが向かう目的地に相応しく、素晴らしい坂道になっている。それは、渦と海とを結んでいるのである。通りのはずれ、背後に砂地が広がる手すりのところで、私はいつもしばらく立ち止まり、黙って眺めることで、彼方に会釈した。

彼方は語りかけた。それは力強く歌うことのできる声を持っている。わずかに3音か4音しか知らない声が、旋律のない歌、激しく荒れ狂うようなリズムを歌い、そのリズムは、万人の憧れを目覚めさせ、鈍くなった心を揺り動かすのだ。

私は海沿いに歩いた。海岸に沿って伸びる通りには、葉を落とした木々が立っていた。遅咲きの花壇は、まだ赤や黄色に燃え立っていた。しかし、銀柳の葉を落とした枝が、印象を決定していた。どんより曇った日、その枝は、灰青色の空をバックに、褐色がかった姿をさらしていた。海は、さえない灰色がかった緑色で横たわり、波頭も輝きを失っていた。至る所で、無気力とひ弱さが勝利を収めていた。夏の色合い、赤やオレンジで華やかに彩色された海の家や垣根が、その間に無表情で横たわり、楽器、たとえば壊れたトランペットやティンパニーを思わせた。それらは、その形態からすると音を出すように定められていたのだが、今はもう役に立たなくなり、黙って散乱していた。

海だけが、絶え間なく自分の硬いリズムを打ちながら演奏を続けていた。遠方で泡立つ波が、単調な基本音を作り出した。耳許にかざした貝の中の潮騒のように、波は暗くぼんやりとした響きを立てた。近くで砕け散る波のシンクパーションの拍子が、それにあわせてどよめいた。一つの波が崩れ落ち流れ出すと、その後ろで別の波がうなりをあげて上昇してくる。晴れた日、そのリズムは狂宴のように情熱的であり、曇った日には、絶望の歌のように、孤独の中で単調に響いた…。

私のホテルのすぐ前に月桂樹に囲まれたテニスコートが

あった。そこでは、まだ日差しの暖かい昼間に、白いスポーツウエアのカップルがプレーしていた。そのプレーを見物するのが、私の大の楽しみだった。人間の最も完全な行為は遊戯であるという考えは、プレーヤーが置かれたこの活気に満ちた運動状態を見れば、もはや否定され得ないであろう。それが単になされているというだけの意味しか持たぬこうした行為、子供において最も純粋に作用し、それが内在するすべての仕事を気高いものにし得る遊戯本能は、まさに感嘆すべきものであり、あらゆる比較を超越している。ボールを空中に打ち出そうとする欲求以上に重要なものはここでは存在し得ない。すべての重みが消え去り、跳躍と飛翔の中に溶解していた。プレーヤーは、いつでも空中に飛び上がることが出来た。ボールは弾丸のように鋭く飛んで、薄いネットを越えた。視線は、もはやそれを追うことが出来なかった。ボールは、ラケットの間でまぶしい光線のように閃き、少年と少女は身をかがめ、飛び上った。淡紅色のコートの上で、絶えずボールを打ち返そうと身構えながら、彼らは軽々と踊っていた。そのプレーは、まるできりが無いものに思われた。だが、たまたま狙いが低過ぎると、ボールはネットに引っ掛かって、網に捕えられた鳥のようにその中でバタバタ跳ね、少女のきらきらした笑い声が響いている間に、力なく地面に落ちるのだった。

私が滞在していたホテルは、新築で、海岸のすぐそばのかなり広々とした敷地に建っていた。それは客を、ピカピカの清潔な姿で迎えた。明るい階段や廊下を通るとき、この建物を築いた時代にたいする深い満足感が客の心をとらえた。自信と力強さが建物にみなぎっており、客は安んじて未来に思いをはせ、現在自分に生が許されていることを嬉しく思った。広々とした、天井の高い私の部屋は、ある気分で客を取り囲むような真似はしなかった。それは、偏りのない実用的な部屋以上でもなければ以下でもなかった。客はその部屋に足を踏み入れて満足し、また心置きなく立ち去ることが出来た。オーナーの好みを満たしはするが客の好みを著しく害するような絵は、一枚もそこには掛かっていなかった。その気違いじみた模様から今までの客の視線を見つめ返してきた、眠れぬ夜を助長する悪趣味な壁紙もそこにはなかった。明るい黄色の壁紙がとぎれることなく壁を覆っており、それは、照明次第で、小麦畑や日に照らされた砂浜を想起させた。

部屋の一方の面は、光によって完全に規定されていた。ガラス戸を開ければ、バルコニーに出られ、そこから海を望むことが出来た。時折、私は、ほんのしばらく、せいぜい一分ぐらい外を見ようと心に決めた。だが、その度毎に私は思い止まった。海は、魔術的な力を持っていた。どんな安らぎも、その巨大な水面下で溺死した。海は、魂を持

統的な緊張状態に置くのだった。いかなる瞬間でも、海には、魂を巻き込む用意が出来ていた。絶え間ない波の渦で、海はリズムを刻み、歌っていた。安全な家も強力な車も沈み、岩や庭も溺れてしまう。元のままなのはしなやかな魚だけだ。海に接した魂は、沈むか変化し、船に変身して、波の打撃にも安全な空間を自らの内に形造る。その姿は、水圧のため、また巧みに波を切って進めるように、イルカのような細身だ。魂の素晴らしい道具である帆が立てられ、無形の空間を横断するために、魂はあらゆる風を利用する。嵐と絶望的ななぎの後、陸地を認めた魂は未知の岸辺に着く。何たる天佑！数時間停泊して、そこに長居はせず、魂は、宝のうち、自分の船倉に入る分だけを持って行く。空しさの誘惑が、魂を新たにいぎなうのだ。

帆に風をいっぱい受けて、魂は、空と水の底を、無の背後を、現世の何らかの具体的なものよりはるかに現実的に進んで行くのである。

ウディネ⁴⁾から来た男をのぞけば、私はこのホテルで唯一の客だった。海水浴のシーズンは終わっていた。オーナーの家族7人は広い大食堂で食事を摂り、そこには、小さなテーブルが私のために用意されていた。私はいつも(確かに理由はないのだが)、とりわけ食事に遅れてきたり、ボーイの給仕が後回しになるときは、自分が慈悲でここに置いてもらっている、向こうの大テーブルから自分用に残されたものだけを頂戴しているというような感じを抱くのがあった。

重苦しい気分がいつも広間を支配していた。その原因がこの家の長女にあることは明白だった。その娘は、泣き腫らした目をして食卓に就き、出された料理をほとんど食べなかった。食事中は、必要最小限の言葉しか交わされなかった。たいてい、沈黙が支配していた。出入りするボーイの長靴の鳴る音が、大広間にこだました。食器がカチャカチャ音を立て、窓の前では冬の蠅がブンブン唸っていた。

ウディネから来た男は、私のテーブルの向かいに座っていた。考えられないほど大きな体格の中年の男で、食事のときには青い帽子をかぶって現われ、ボーイが料理を運んでくると、それを脱いだ。すると、髪のない脂肪のついた頭があらわになった。その頭は、嫌な眺めだった。膨れた青白い頬のあいだに小さな鼻が隠れ、目や口はほとんど見えなかった。

彼の食事は、いつもトーストにしたパンと半熟玉子に決まっていた。彼は玉子を音を立ててすすり、小さなスプーンを使って残りの中身を空にするのだった。彼はゆっくり、

馬鹿丁寧に食べ、トーストにしたパンを何分間も口の中で転がし、レモンジュースを一気に飲み干した。

ある晩、彼は、いつものようにすぐ広間をあとにするのではなく、思いがけなく、家族のテーブルの方に向かって行った。父や母、長男といった大人たちは、当惑してほんやり前方を見つめていた。しかし、娘は驚いて彼の方を見た。幼い3人の弟や妹たちは、歩いてくる山を払い除けようとでもするかのように、スプーンをカチャカチャいわせ始めた。

テーブルに到達して、彼は、切れ切れの言葉を吐き出すように言ったが、私には、エレナという名前しか分からなかった。娘はワッと泣き出し、絶望してすすり泣きを始め、テーブルの上に腕を広げて、それで顔を隠すようにした。

そのあと、彼は引き返してきて、ゆっくりドアの方に向かい、私のそばを通り過ぎて行った。彼の不細工な顔面には、悲哀とどうしようもない痛ましが広がった。一本の皺が額に走り、真ん中で伸びて、私が今までそこに見たこともなかった溝を刻んでいた。口は半開きで、彼には歯がないことが知れた。

この椿事のあとで、私はこっそり外へ出て、バーのカウンターに腰掛けた。そこで、オーナーの長男のリノが、私のために、ベルモットとグラッパのカクテルを作ってくれた。「あの子は奴と結婚したんですよ」と、彼は単刀直入に話し出した。彼は、ホテルの唯一の客であるこの私に何か説明する義務があると感じてはいるが、適当な前置きが見つからないようだった。「奴が自分の金で俺達を困窮から救ってくれたので、妹は奴と結婚したんです。今年の夏、俺達は大ピンチでした。ホテルは儲からないし、借金もかさみました。妹は一か月前に奴と結婚したんです。一週間してあの子は戻ってきました。なぜだかお分かりでしょう。奴は、次の列車で後を追ってきて、今、俺達と同居しています。ひどい話ですよ。」

哀願するように私を見つめた彼は、私の助言を待っていた。だが、私に何が出来ただろう？よく考えてみると、目下の事情では、教会がこの結婚を解消する力にはなり得なかった。

「彼は離婚するつもりはないでしょう。エレナにぞっこん惚れ込んでいるんですから。それに、考えてもみて下さい！俺達の商売は…」

私は夢を見た。その夢は生気に溢れたもので、目を開けて部屋の明りを見たとき、自分は今まで目を覚ましていて、これから夢を見るんだと思えたほど、その世界は現実に近いかった。誰かの腕が私の体の上に置かれているようだった。夢の世界で人が原因や理由を問うことを諦めるときに持つ寛容さで、私はなすがままにされていた。しかし、その腕

は、私を揺すり始めた。私は目を覚まして、以前の夢の中の声とは別の声が「起きて下さい。どうか私を助けて下さい」と言うのを聞いたように思った。

エレナが私の上に身をかがめていた。伝説の女戦士のように、彼女は、上半身を剥き出しにしたままスカートだけを身につけて立っていた。私は本能的に盾と弓を探し求めた。

「来て下さい」と、彼女は再び切迫した声で頼んだ。

私は身を起こし、皺くちゃのパジャマを着たままで暗い廊下に歩み出た。エレナはすでに先に立って行っていた。廊下で立って辺りを見回したとき彼女の姿はなかった。だが、隣室のドアが開けっ放しになっていた。部屋には灯火がともっていた。中に入ると、ウディネから来た男がベッドの上で伸びているのが見えた。彼は身動きもしなかった。巨大な体躯が裸で横たわっていたので、彼はきっと酔いつぶれているに違いないと、私は初め思った。そこに至極ゆったりと横たわっている彼の肥満体、灯火に照らされて赤味を帯びた現世の豊かさのとてつもない堆積物は、初めて陽気さを私に感じさせた。いつもごちなく哀れっぽく見えたこの男と、今やっと幸福を共有することが出来たという喜びが、私の心をとらえた。魂が今まで敵意を抱いていた体によく安住の地を見出したかのように彼は横たわっていた。この男が身を起こすことはもうないように思われた。彼はいつまでもゆったり横たわっていなければならない。そうすれば、彼の体の中で矛盾が生まれることもなかろう。それが生起し始めるとくだらぬ動揺が新たに彼に降りかかるに違いない。彼の体はもう自分の意のままにならない。どこか別の場所に行きたいのなら、担架に乗せられあちこち担ぎ回ってもらわねばならない。彼の巨躯の尊厳さとくっきり優雅な対照をなす、浅黒い肌の召使いたちによって。彼は身動きもせず、暑い庭の静けさの中で横たわっていなければならないだろう。花々、赤いグラジオラス、香炉から立ち昇る芳香が彼を取り巻き、彼の頭の上では、絶えずペチャクチャ喋るオウムの金色の籠が揺れていなければならないだろう…。見る間に彼の体は嵩を増し、神秘的な成長を遂げ、彼の魂の安らぎはさらに深まるだろう…。途方もない幸福の告知が世界を駆け抜ける…。

エレナは物も言わずに、開いたバルコニーの戸口に立っていた。異様な光景に圧倒されて、私は彼女のことを全く気にも留めなかった。私が彼女の存在に初めて気付いたのは、隣のベッドの上に置いてある黒っぽいブラウスを目にした時だった。

私は振り返って見た。太古の伝説的な苦悩が彼女の顔に表われそれを荒廃させていた。だが同時に、そこからは、孤独者がそれで敵対する世界に抵抗する静かな絶望の力が

語りかけていた。

彼女が私に何も期待していないのは明らかだった。何も言わず、沈黙したままで、彼女は私に身動きしない男を指し示した。彼女には、この男の静けさをもはや克服することが出来なかったのだ。誰かに彼を助けに来て貰いたがために、彼女は私を起こしたのだ。彼女自身はあらゆる援助を拒んでいた。それどころか、たとえその援助が純粋で完全な善意からなされたとしても、彼女はそれを恐れ憎んだに違いない。同情の言葉は、困惑の中でも毅然としているために必要な野生の力を彼女から奪い取るであろう。彼女が他人である宿泊客を起こした理由、自分の両親を最初にここに連れてくるのをはばかった理由が、私には理解できた。

意識を麻痺させるような嫌なぼんやりした甘い香りが、部屋に入り込んだ。バルコニーのドアを通して入ってくる新鮮な空気も、それを薄めるだけで、駆逐することは出来なかった。ナイトテーブルの上には半分空になった小瓶が置いてあった。血まみれのタオルが私の足に絡み付いた。

実際、私が近寄った時には、ウディネから来た男は、今までにお目にかかったこともないような平和で幸福に満ちた顔付きをしていた。私は彼の脈を見たが、それが止まっているのか打っているのかははっきり分からなかった。耳を心臓と覚しき個所に押し付けると、かすかで不規則な鼓動が聞こえた。

私は出て行って、電話で医者に知らせた。家中に次第に広がりつつある不穏な雰囲気気付いて、エレナの両親が目覚めた。彼らは、着の身着のまま大急ぎでやって来てわめき声を上げ、すすり泣いた…。通りから、エンジンの唸る音が聞こえてきた。救急車が到着したのだ。

両親は病人を診察する医者にすがりついた。「脳の麻痺ですね」と、彼はそっけなく言った。「命に別状はないでしょう。」

みんなはホッと溜息をついた。付添人と看護婦が姿を見せ、担架が運び込まれた。病人がその担架で運ばれるとき、悲喜劇的な突発事件が起きたが、それは起こるべくして起こったと言える。二人の看護人——そのうちの一人は喘息病みだった——は、重い病人を持ち上げようとしたが無駄だった。彼らの力ではとても間に合わなかった。医者と私自身が手を貸して病人をうまく担架に乗せ、看護人たちが第一歩を踏み出したとき、弱い床架が真っ二つに折れてしまったのである。われわれが全員同時に飛んで行ったので、病人は落下の危険を免れた。

電話で連絡したあと、人々は待った。両親はエレナに、分かり切ったことや的外れなことをくどくど質問した。口で言えることには確かに限度があるが、それでも彼らは出

来るだけ正確に事情を把握したがった。私はそんな話には興味がないので、もう自分の助けが必要でないことが分かると、すぐさま引き下がった。

訳注

1) イタリアのパドヴァに1222年9月29日に創立された、イタリアで2番目に古い大学（最古の大学はボローニャ大学）。ガリレオ・ガリレイ、ダンテ、ペトラルカが

教授を務めるなど、歴史上の有名人が多くかかわっている。

- 2) ヴェネツィア本島の東南にある長さ12kmの細長い島。アドリア海に面した長い海岸線は夏のビーチリゾートのメッカとなっている。
- 3) ヴェネツィアの海岸通り。
- 4) イタリア北東部の都市。トリエステとヴェネツィアの間位置する内陸都市である。